

(同第六卷第九号)

なお、右記事中の出版物とは『木魚遺響』(明治四十二年。芸艸堂)、『黙語図案集』(同、同)、『黙語日本画集』(同、同)、『黙語西洋画集』(同四十三年、同)等をさす。

#### ⑧ 国華俱樂部設立

明治四十一年七月五日、正木直彦が中心となって美術界の社交機関として結成した国華倶楽部の発会式が上野の美術協会で行われた。参加者は凡そ百名で、シカゴ大学文学部教授マックリントット、杉原栄三郎、坪谷善四郎の講演や山下迂作等の狂言があった(『東京美術学校校友会月報』第七卷第一号)。同会は正木を幹事長とし、毎月の例会には講演会、作品展観、各種余興、俳句会等々を行なっただけでなく、特にはじめの頃は美術家懇親会を主催したり、美術行政に関して建議を行ない、あるいは国や東京府の諮詢に応ずるなど、積極的に活動を展開し、正木が退官した翌年の昭和八年に至って解散した。結城素明は同会について「正木先生と国華倶楽部」(『美育』第六卷第五号正木会長追悼号。昭和十五年五月)の中で次のように述べている。

處で正木先生は明治三十四年八月、久保田鼎校長の後任として東京美術学校に赴任せられた折、従前より岡倉先生とは昵懇の仲でもあったので種々學校行事につき相談もし、前記の美術院より下村觀山、寺崎廣業、小堀輛音三氏を引き抜き教授にする等格別

の交渉がありました。岡倉先生のなされた日本繪畫協会の仕事に倣はれてか、學校派と在野美術家との融和、連結を謀る事がやはり斯道の發達、發展に必要であると考へられて明治四十一年に美術界の名士、愛好者並に美術、新聞記者其他を會員とする國華俱樂部を創立し、自ら會長となつて、右手に學校、所謂官、左手に國華俱樂部、所謂野と言ふ具合にこの兩者を左右に持して美術行政を圓滑に進められて來たのであります。

扱てこの俱樂部は會費制度として毎月懇談例會を開いたもので、美校俱樂部、上野公園内精養軒、同韻松亭、又は同俱樂部で買収した下谷鶯谷の料亭伊香保樓等を會場として、會員各自が自作品、收藏品などを持參して鑑賞、懇談しあい、籤引をして交換したり、種々の餘興も出たりして誠に趣好に富み、風雅に時を過したもので盛時には二百五十名以上の集合もあつた程でありました。そして時には斯道の大家、有力者を招聘して講演會を催し、その講演速記録を編輯、本として發行する等各位の意志の疏通を計り、日本美術の全般に亘り知らず／＼にその向上發展を期せしめて今日世界に誇る日本美術工藝の基礎を植ゑつけられたのであります。

#### ⑨ 第二回文展と国画玉成会第一回展

第二回文展は明治四十一年十月十五日から十一月二十三日まで上野公園桜が丘の日本美術協会展品館および旧東京勸業博覽會第二号館で開かれた。このときは日本画部門で旧派の正派同志會が巻き返しの挙に出た。すなわち、明治四十一年七月、第二次桂内閣が成立

して貴族院議員小松原英太郎が文部大臣に就任するや、小松原は同じく貴族院議員で日本美術協会幹部の下条桂谷、平山成信、武井守正、馬屋原彰、谷森真男らと相談の上、突如文展審査委員に正派同志会の高島北海、望月金鳳、益頭峻南、荒木十畝、山岡米華らと野村文孝の六名を加えることを発表したのである。これは正木直彦や福原鎌二郎ら従来の選考委員を全く無視した一方的な決定であった。当然のことながら国画玉成会はこれに憤激し、文展と期を同じくして別に竹の台陳列館で日本絵画展覧会を開いた。文展には正派同志会と京都派の画家が出品し、京都派の竹内栖鳳筆「飼はれたる猿と兎」山元春拳筆「雪松図」や川合玉堂の「秋山遊鹿」などが好評を博す一方、旧派大家の作は評判が悪かった。国画玉成会展の方は安田鞞彦筆「守屋大連」下村観山筆「大原御幸絵巻」などが注目を集めた。川端玉章、寺崎広業、川合玉堂らは文展と国画玉成会の両方に出品した。

西洋画、彫刻の部門ではこのような分裂はなかったが、裸体彫刻は風教上問題があるので特別室に陳列して一般の目には触れさせないという措置がとられ、新海竹太郎の「ふたり」、石川確治の「花の雫」、建島大夢の「閑静」が特別室入りとなった。西洋画で好評を博したのは和田三造の「焔燻」、吉田博の「雨後の夕」、中川八郎の「北国の冬」、山本森之助の「漁村の遠望」、鹿子木孟郎の「ノルマンデーの浜辺」、橋本邦助の「水のほとり」等々で、彫刻では萩原守衛の「文覚」、新海竹太郎の「ふたり」、朝倉文夫の「闇」、米原雲海の「寒山子」、山崎朝雲の「大葉子」等々であった。

なお、本校関係者（現職教官、卒業生、生徒）の出品（入選）状況

は凡そ次のとおりであった。

#### 文展

（日本画）川端玉章、寺崎広業、戸田天波、渡辺萊渚

（西洋画）黒田清輝、岡田三郎助、和田英作、小林万吾、中沢弘

光、山下繁雄、跡見泰、岡吉枝、中野營三、五島健三、和田

三造、郡司卯之助、長谷川昇、倉田白羊、辻永、田辺至、中

村勝治郎、出口清三郎、赤松麟作、加藤静児、橋本邦助、長

原孝太郎、山本森之助、熊谷守一、渡辺省三、湯浅一郎、斎

藤五百枝 出品総数の約26%。

（彫刻）白井雨山、水谷鉄也、中村直彦、山崎和沾、青木外吉、

芦野廣、藤井浩祐、朝倉文夫、毛利教武、石川確治、小倉右

一郎、北村西望、杉本伝、建島大夢、吉田祥三、内藤伸、宮

原常二郎 出品総数の約60%。

#### 国画玉成会展

川端玉章、寺崎広業、本多天城、木村武山、下村観山、横山

大観、勝田蕉琴、山脇荷声

#### ⑩ 橋本雅邦死去

明治四十一年一月十三日、もと教授橋本雅邦が死去した。雅邦は本校創設以来絵画教育の指導にあたり、明治三十一年春、岡倉覚三の校長辞任の際にともに辞職して日本美術院を創設。以来同院主幹（同三十九年まで）として後進の指導につとめ、同四十年文展開設の際には審査委員に挙げられた。

葬儀は一月十六日深川壺岸町の浄心寺で執行され、門下生総代川